

<図表5 - 2 - 2> 工業の特質の違い 大森西地区（大田区）

	集積の特徴	製品の特徴	労働者
戦前	<ul style="list-style-type: none"> ・大規模工場の誘致 <p>関東大震災後、京浜間に位置することなどから品川・川崎から大工場が続々と集積。また、それらの下請け工場が派生。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 区画整理がされていた 2. 工場地帯指定を受けていた 3. 未開発地としての土地があった 	<ul style="list-style-type: none"> ・電気機械工業の下請け <p>主に工作技術・専用機械・測定器など資本財中心の基盤技術を担った。戦時中は軍需産業中心で、工場は高精度な技術をつけられた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・徒弟制度 <p>地方からの労働者が多く集まっていた。この地域の地場産業であった海苔産業でも、季節外労働者を多く受け入れていたため、そうした下地ができていた。三食賄い付きで工場に住み込み、職人になっていく場合が多かった。</p>
1945 (S.20)	<ul style="list-style-type: none"> ・特需による復興 <p>戦前に軍需工場の指定を受けていた工場が、敗戦後は日用品の生産から再開。しかし、朝鮮戦争の勃発で、再び電気機械工業が再生。それに伴い下請け工場の創業が増加。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日用品の生産から再出発。朝鮮特需によって資本財の生産が甦る <p>製品は電気機械の中でも軽装備なものを扱う。下請け工場は基盤技術をそれぞれもつ。大工場との受注関係は一社依存でない。ベルト式の機械が導入された。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・徒弟制度の継続 <p>戦前から伝わる徒弟制度の雰囲気、雇用形態や職場には色濃く残っていた。職場と住居は一体となっていて、町工場は勤労の場であるだけでなく、生活の場、教育の場であった。そうして技能が伝承された。</p>
1955 (S.30)	<ul style="list-style-type: none"> ・中小工場・零細工場の新規創業 <p>リーディングカンパニーが存在し、協力関係を結ぶ下請け工場を生んだ。軍需産業で育てられた技術が集積の要因になる。操業に、大がかりな機械が不要で、工場は小規模。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中小零細のバランスが取れた集積 	<ul style="list-style-type: none"> ・工作機械の性能が向上 ・ベルト式 直結式 ・基盤技術とされる加工業中心 <p>リーディングカンパニーの扱う軽装備な製品にあわせ、電気関連の加工業。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・集団就職 <p>大田区工業連合会が他府県の中卒者の集団求人事業を開始(23区中従業員数1位)。大量の養成工が流入した。給食事業など福利厚生面の充実が図られる。</p>
1965 (S.40)	<ul style="list-style-type: none"> ・住工分離策による大工場の転出 <p>工場制限三法により、大規模工場の移転が始まる。その際研究開発部や本社機能を区内に残す企業も見られる。跡地は分割利用されるなどし、さらに中小工場が集積。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公害工場の集団移転 	<ul style="list-style-type: none"> ・多品種・少量特殊加工へ <p>工場規模の縮小から内面の高度化が進む。研究開発部の集積から試作品などより高度な加工技術と専門性、特殊性を必要とするものが手掛けられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・S・48のオイルショックにより量産体制は困難を極める 	<ul style="list-style-type: none"> ・独立創業ブーム <p>家の玄関先で創業する職人が増加。工場は住工一体の零細。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公害への対応 <p>地域住民の間から公害意識が持ち上がる。公害対策のような直接利益につながらない設備投資は、廃業を招く中小・零細工場を生んだ。</p>
1975 (S.50)	<ul style="list-style-type: none"> ・小零細化の進行 <p>大工場や公害工場の移転後、そこには都心から押し出されてくる中小工場が集積。都心の商業化が進むにつれその傾向は強くなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一方でのマンション化 <p>住工の混在が複雑さを増す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ME革命 <p>より高精度な製品生産が求められ技術革新が起こる。</p> <p>しかし、多品種・少量特殊加工には熟練工の技術が欠かせなかった。一方的な機械化ではなく、機械の導入と技術の維持を両立させた工場が生き残る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人手不足 <p>機械化の導入が進んだことで、補われる仕事もあった。</p> <p>人の手に頼りたい仕事に関しては、町中にあるという利点を生かし、パートや内職を雇う。</p>
1985 (S.60)	<ul style="list-style-type: none"> ・住工調和への志向 <p>工場の転出によって、町は産業の空洞化が進む。産業の力が見直され、町の外観にあわせた工場が増加。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・製品開発型 <p>バブル景気の影響で、下請けの仕事は海外へ流出。NC機械に依存した工場は競争に敗れ、高度な開発技術を持つ企業が残った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・転廃業者の増加 <p>地価の高騰など、バブル景気の影響を受け、経営困難に陥る人が増える。隣接するマンションなどとの住工混在問題もあり、町中での工場環境は悪化。</p>
1995 (H.70)	<p>宅地化の勢いに押され気味になっている。</p>	<p>最先端の技術ばかりではなく、隙間産業にも着目するなど、研究は進められている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・後継者不足 <p>小零細工場経営者の高齢化が進み、それに伴い熟練工の減少も見られる。技術の断絶が懸念される。</p>

	規模と拡張性	ネットワークと組合	その他
戦前	<ul style="list-style-type: none"> ・軍需用の大規模工場 未開発の土地が多く、工場が集積しやすい状況にあった。戦時中は大工場が優遇され、住民を強制疎開させて大工場を誘致する事もあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大森機械工場徒弟学校の設立 大田区内の工場経営者たちによって実現された。地域の中で職人を育てようとする意識が芽生えていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・S.2 第一京浜の開通 ・S.4 産業道路の開通
1945 (S.20)	<ul style="list-style-type: none"> ・大規模工場の復興 戦前からの跡地で復興する工場が多く見られた。そのうえかつて第一次産業用地として利用されていた土地への拡張が可能だった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・技能の伝承 親方・職人・徒弟という工場の中での階層が、技術を伝えるネットワークだったといえる。また町の中では、近隣の工場同士がそれぞれの基盤技術を持ちよって注文を仕上げるなどの協力ができた。 	
1955 (S.30)	<ul style="list-style-type: none"> ・中小規模工場の増加 家の玄関先でも操業が可能な業種が多いため、工場は細分化。一人親方工場と呼ばれる零細機械部品工場が増加する。一方で大工場を移転させるための埋立地建設が行われる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大田工業連合会創立 大規模工場と下請け工場との協力関係が強く結ばれていた。しかしそのため大工場の景気の影響をそのまま受けていた。 	<ul style="list-style-type: none"> S.38 漁業権放棄 S.39 首都高速一号線の開通 東京モノレールの開通 環状七号線の開通 ・公害問題の表面化 ・平和島の一部が大田区に編入
1965 (S.40)	<ul style="list-style-type: none"> ・零細化の進行 事業規模拡大などのために地方へ転出する大工場が多い中、中小零細工場は、その工場跡地を分割利用。 	<ul style="list-style-type: none"> ・近隣ネットワーク 仲間間で製品を持ち回ったり、欠けている業種への転換を試みる。 ・移転後のネットワーク 交通網の発達、通信機器の発達から遠隔地との取引もスムーズになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・円高不況
1975 (S.50)	<ul style="list-style-type: none"> ・規模の縮小 機械の精度が上がり、小型化されたことによって、工場敷地の縮小が可能になる。また、職人の不足を機械の力である程度補うことができ、人件費の削減にもなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットワークの維持 研究開発試作工場として性格付けされた地域であるため、地方へ移転した企業も、ここに情報を求める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・S.50 京浜島が大田区に編入 ・S.54 東海島、城南島も編入
1985 (S.60)	<ul style="list-style-type: none"> ・工場数の減少と土地の高度利用 地価の高騰が主な原因。工場の階上に住居が併設されるタイプが多くなり、また大田区内の他の地域では工場が重層階になっている建物がつくられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大田区異業種交流会の発足 	<ul style="list-style-type: none"> ・バブル景気(S.60～63) ・平成不況
1995 (H.7)	<ul style="list-style-type: none"> バブル景気の崩壊から中小零細工場の廃業が増加。跡地は宅地化、マンション化され、残された工場も工場環境の悪化で経営困難になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・産業プラザの開所 ・大田区内優工場の表彰制度開始 	<ul style="list-style-type: none"> ・H.7 産業のまちづくり条例